

特集にあたって

高 木 裕

口承的な「語り」が先か、テキストが先かという問題は別にして、テキストを読解＝読み上げ（lecture）すると、そこには＜声＞が立ち現れる。韻文定型詩の場合、テキストの＜声＞は、まずは語りの＜声＞として、現れる、と言いうるかもしれないが、この＜声＞は、むしろ生成すると言う方が適切かもしれない。抒情詩のテキストの読解において、読者は、詩の語り手、発話者の声をたどりながら（一人称の発話者であれば、自己同化しながら）、詩の内的世界へ導かれる。ところで、この導きの＜声＞は、発話 énonciation のレベルでのみ形成されるのではなく、その生成には、一つは詩的言語のリズム、音韻という聴覚面、もう一つは印字法という視覚面も関わっている。たとえば、ネルヴェールの有名なソネ「魔嫡者」を例にとってみよう。最終詩節の「オルフェウスの堅琴に合わせながら、こもごもに抑揚をつけて（・・・）」Modulant tour à tour sur la lyre d'Orphée は、口の開きの狭い母音[o][y][u][i][e]と流音の[r]を組み合わせて、「聖女のため息と妖精の叫び」をまさに音韻の面で＜声＞として響かせている。一方、視覚的な効果としては、11行目の詩句「私はセイレンの泳ぐ洞窟で夢を見た・・・」の最後の省略符「・・・」は、セイレンの声の響き渡る洞窟の中で、魔術的に魅惑され、恍惚となった主体の＜声＞を表出するものとなっている。詩のテキストにおいては、語りの＜声＞と言葉の聴覚的・視覚的な要素から醸し出される＜声＞が相互に絡み合い、そこで生成している。テキストの＜声＞は、その＜声＞そのものの複数性、多声、多様性の問題から、人間の五感とも連動し、「身体的なもの」に深く関わっている。

今回のプロジェクト特集では、「見るということ」あるいは「聴くということ」がテキストの成立に主題論的あるいは言語論的に関わっているのかということを実に示す論考が集まった。国文学関係の3篇の論文が面白い視点

を提供している。鈴木孝庸氏の「祇園精舎語りの秘曲性」は、〈小秘事〉として特別扱いされてきた平曲「祇園精舎」のどのようなところに「秘」たる所以があったのかについて検討している。まず、現存の文字テキストのうち、延慶本と覚一本とを代表的な形とみて、質的先後的差異を述べ、ついで、譜本（すなわち文学テキストと音楽符号）を検討し、平曲「祇園精舎」は、覚一本的テキストを尊重し伝承することに主眼があり、文学が主で、音楽は従という関係が変化することはなく、平曲伝承は、時代が降るにつれて、微細な表現の工夫が加わるようになったと指摘している。ここでは「謡うこと」「聴くこと」が、むしろ成立したテキストの「その後」に影響を与えているようだ。廣部俊也氏は論文「行為としての『見立』」において、近世文学における「見立」のとらえ方は盛んに議論されているが、浮世絵や歌舞伎など視覚で享受するジャンル、及び俳諧についてはよく考察されるものの他のジャンルはあまり取上げられないと指摘し、その上で、例えば小咄本を見ると、近世を通じて、「何かを見て複数の人が各々何かに似ていると指摘する」という、一種の言語遊戯としての「見立」が行われ続けたことがわかるとし、こうした「行為としての見立」の様相から、見立てるという発想を、俳諧など文藝の場に限らず、言語を介した基本的な認識能力の発露として広く捉えるべきものであると主張する。「見立てる」という視覚的な認識を言語認識の領野へと変換するところに、さまざまな欲望の遍在を見て取ろうとするものである。先田進氏の論文「『金閣寺』論—《金閣の目》をめぐって—」では、三島の『金閣寺』の主人公が国宝金閣への放火を決意するに際して、外界との関係において、主人公が従来の《見る》姿勢から《聴く》姿勢へと転換したことが重要な契機となったのではないかとし、主人公がこれまでの金閣を媒介にしての《見る》ことと「蜂の目」の視線とを比較対照している点、友人である柏木に音楽（尺八）の手ほどきを受けた点に着目し、この仮説を論証しようと試みたものである。「見るということ」ことから「聴くということ」への主題論的な変化に、物語の重要な契機を捉えようとするものである。高木の「ネルヴァルの抒情の探究と〈声〉」は、ネルヴァルの抒情の探究にあって、「歌」への、「古謡」への注目から、しだいに声を「聴くという体験」の方に関心が移り、〈声〉の身体的な経験というものへの焦点化が、

失われた「私」の内奥への探究，オルフェウスの起源の探究につながるものであることを追究したものである。声を聴きとること，声を発すること，声を求めることは，古来，起源的にテキストの成立に深く関与している。これはテキストに内在する〈声〉の問題のみならず，テキストの生成という根源的な問題へと広がり，そこにわれわれの研究プロジェクト「〈声〉とテキスト論」のきわめて多様な探究の場が開かれている。